いざなぎ流太夫はかく語りき

インタビュー

いざなぎ流太夫
森安正芳さん

森安さんが太夫になった経緯は？

若いころから京都に30年間住んでいた。平成になる少し前のことだったと思うが、亡くなった祖父が夢に出てきた。

夢の中で、私がいろりの前に座っていると、祖父が戸棚から白い本を取り出して、私に手渡してくれる。そしてその1週間後、また祖父が夢に出てきて、今度は笏（しゃく）（神官などが持つ平たい板）をくれた。これはしまい、と。どうも太夫になれということかと。祖父は生前太夫をしていたので。

それから修行を始めて、平成5年ごろ師匠から許しをもらって太夫となった。私は笹の出身。そのころ笹といえば太夫の多い土地柄だったから、子どものころからいざなぎ流には触れてきた。それこそ空気のように、体に染み付いているもの。なので、覚えも早かったように思う。

太夫とはどんな存在でしたか？

祖父をはじめとして、子どものころから周りにたくさんいた。いまでこそ数が少なくなり、祭りや祈祷をできる人が周りにいなくなったので、太夫といえば依頼を受けて各地へ出向くのが通常。しかし昔は地域にたくさんの太夫がいて、請われて祈祷などに出向く太夫はほんの一握り。特に力のある人だけ。多くの太夫は土地に根ざし、他の仕事をしながら太夫の役割を担ってきた。

身近で、神聖で、怖いものだった。たくさん太夫がいたというのは、それだけ需要があったということ。現在では、病気になれば病院にいく。しかしその時代は、病院に行くというのは大仕事。そこで太夫を雇い、病人祈祷をする。

「太夫というのは神聖で恐ろしいもの」ということを、多くの人が感じ、信じている。信じられている信仰というのは、やはりその分、力が強い。

いまでは時代が変わってきたが、多くの人に必要とされ、頼られていた。

太夫の一日の務めというものは？

依頼があって、祭りや祈祷に出向く日には、家を出る前に1時間ほど祈る。

全国の神様の名前、先祖や氏神、そして、御子神（力の強かった過去の太夫たちが神格化したもの）の名前を全て呼ぶ。そして「これからどこそこへいって、これこれこういう祈祷をするので、万事うまくいきますように」と祈る。

自分一人が何とかするのではなく、頼り、信じるという気持ちがある。

太夫を育てるということは？

いま私のところには、7〜8人が太夫の作法を習いに来ている。地元の人もいるし、遠く岩手から来ている人もいる。若い人もいて、いまはいざなぎ流の基本である家祈祷（やぎとう）（家を守ってくださいという祈祷）を教えている。

私が師匠に弟子入りしたときには、家々で祭りがあれば常について行き、祭りを行う中で見て作法を覚えた。

現代ではなかなかそういうことが難しい。例えば私がどこかの家に祈祷を頼まれても、弟子をぞろぞろ連れて行けない。そういう場が少ないということは、伝えていくことが難しくなっているということ。

いざなぎ流はあくまで口伝で、書物で残すものではなかった。いざなぎ流の中には、呪いというような怖いものが含まれている。そういうものを書物で残すことは危険であるという考えがあるのだと思う。解くすべを知らない者が、しばってはいけない。呪いなんて、誰でも使えていいはずがないからね。

いざなぎ流の逸話があれば

そりゃあ山ほどある。

例えばこの面（本号表紙の面）。元々猪ノ谷という地域に伝わってきた面だが、この面は非常に法力の強い面だった。日光院という修験者との法力比べに勝ち、その家を焼いたというような逸話があり、とても名のある面。その面を一目見ようと訪ねてきた坊さんが面の箱を開け、頭を垂れて祈りをささげたが、そのまま上から押さえつけられたようになって、頭を上げることができなくなったという（現在この面は、太夫が鎮めて県立歴史民族資料館に寄贈）。

「この場所で太夫が法力を使った」というような伝説や逸話が、いろいろな土地に根づく形で濃密に残っている。

人間の力を過信せず、自然や先祖、人知を超えるものに対して畏敬の念を抱くこと。感謝の心を持つこと。何も信じられるものがないというのは、悲しいし怖いことではないだろうか。

八つ花の幣

大公神の幣

志岐王子の幣

水神おんたつの幣

県立歴史民俗資料館学芸員に聞く

伝承 これからのいざなぎ流

平成23年に発足した『いざなぎ流と物部川流域の文化を考える会』は、物部町の方々や当館を中心に、小松和彦先生をはじめとした県内外のいざなぎ流研究者を顧問に加えて結成されました。活動は5年目を迎え、これまで香美市内にとどまらず、日本各地でさまざまな研究会や現地見学会を開催してきました。催しの参加者は、延べ2千人を超えています。

これは、香美市が世界に誇る文化であるいざなぎ流を、外に向けて発信していく活動です。そしてそれと同時に、香美市に住んでいる方に対しても、「こんなにすごい文化が、香美市には息づいているんだよ」ということを、改めて知ってもらい、関心を持ってもらうための活動でもあります。

年1回決まった日に村全体で行ってきたような祭りであれば、伝承の機会も多かったでしょうが、いざなぎ流は不定期に行われる家の祭り。祭りを行う家がなくなってきた今、何もしなければ消え失せてしまうものです。

いざなぎ流の魅力や価値を発信するとともに、見る機会や体験する場をなくさないようにする努力が必要だと思うのです。

他地域に残る神楽は、特に舞の部分が洗練され伝わってきましたが、その他の祭儀や祈祷が、現代には残されていないものがほとんどです。いざなぎ流神楽の舞は素朴なものですが、祭文をはじめとして、他の地域に残されていないような世界が広がっています。その独自の魅力を損なわず継承していけるよう、人や土壌をみんなで育てていかなければならないと思います。

梅野光興さん
（県立歴史民俗資料館学芸員）

もっといざなぎ流を知りたい方は

香美市立図書館で貸し出しているいざなぎ流関係の書籍を一部ご紹介。

◆**いざなぎ流の宇宙**
高知県立歴史民俗資料館　編

◆**いざなぎ流の研究**
小松和彦　著

◆**いざなぎ流祭文と儀礼**
斎藤英喜　著

◆**物部の民俗といざなぎ流**
松尾恒一　著

◆**土佐・物部村神々のかたち**
ＩＮＡＸ出版